

Chance! Challenge! Change! チャンスを逃さずチャレンジし、現場を変革する看護部の皆さんを紹介します

水平型チーム医療で 地域の自助力・共助力向上へ

社会医療法人社団さつき会 袖ヶ浦さつき台病院

撮影 神保 誠/取材・文 武藤花奈



前列左より、アシスタントマネジャーの東海林宏美さん、看護部長の竹内美佐子さん、看護部顧問の小川久子さん、アシスタントマネジャーの菅みどりさん。
後列左より、アシスタントマネジャーの藤田さやかさん、ナースィングマネジャーの板倉朋子さん、賀来かおりさん、山口直美さん、小井土智恵さん、アシスタントマネジャーの大江泰子さん、ナースィングマネジャーの松本秀吉さん、大越真絵さん

社会医療法人社団さつき会袖ヶ浦さつき台病院は、1983年に、身体面と精神面の両方をバランスよく治療・ケアできる病院をコンセプトに設立されました。その後、地域のニーズや時代の変化に合わせて規模を拡大し、現在は精神科救急では県南部の基幹病院として、社会医療法人さつき会と社会福祉法人さつき会の2法人、訪問看護ステーションなどの9つの関連施設とともに地域の医療・福祉を支えています。

周辺地域の高齢化が加速する今、同院では地域における自助力・共助力向上を課題としており、チーム医療体制構築に全力を注いでいます。看護部長の竹内美佐さんは、「チーム医療を円滑に進めるには、各職種が専門職の視点を持ちつつ、お互いの不足を補いな

がら働く組織の水平化が最重要と考えます」と語ります。その言葉通り、同院では、医療と福祉が互いに尊重し合い、主体的に治療・ケア計画に関わるべく、全職種が一堂に会し結束力を高める新人合同研修会、成長段階に応じた研修・勉強会、部下が上司を評価する「上司評価制度」、関連施設と合同で行う訪問看護体験実習などを取り入れており、看護部でもチームの一員としての看護師の成長を多角的にサポートしています。竹内さんは「水平型のチーム医療成功の鍵は、看護師。各職種の力を引き出し調整する役割が求められている」と言います。

スタッフたちは“医療を通じて地域貢献を”という熱い思いのもと、日々成長と進化を続けています。

ICF委員会

院内スタッフと顔が見える関係づくりができ、医療と福祉の壁がなくなったのを感じます(訪問看護ステーション所長・玄永春奈さん)

ICFを活用することで全体像が見えるようになりました(ライフメイト・久保田正祥さん)

※同院の介護職は、患者の生命・生活(ライフ)の支援者・理解者・仲間(メイト)という思いを込め、「ライフメイト」と呼ばれています

患者ケアを統一し継続していくプロセスが、チームマネジメントを学ぶ機会になり、職場風土にいい影響を与えました(看護師・板倉朋子さん)

多職種への理解が深まったことで、チームケアに取り組みやすくなりました(リハビリテーション部・石井弓子さん)

食事や排泄など基本ケアの大切さを見直すことができました(看護師・渡部美保子さん)

患者情報を事前にチームで共有し、予後予測をしっかりとうえて患者さんに関わる方法を学びました(医療情報部課長・小泉彩枝さん)



ICF委員会の皆さん

ICFに基づく“健康”サポートへ

ICF委員会は、2011年に総合広域リハ・ケアセンターの竹内正人センター長を中心に発足しました。「より良い生活とより豊かな人生を」を合言葉に、疾患だけでなく、患者さんの背景や家族状況なども含めた、生きること全体をとらえるICF(国際生活機能分類)活動をアセスメントツールに用いて、チーム医療による総合的なリハとケアを行っています。

同委員会はカンファレンス班、ベース班、コーディネーター班の3つから構成され、カンファレンス班では、患者さんの詳細な情報をもとに、一人ひとりに合ったケアを検討しています。また、ベース班では多職種スタッフ向け勉強会を主宰し、院内全体のICFに関する知識を深め、定着させる取り組みを行い、これらをコーディネーター班で統括しています。

ICFの導入後は、治療方針の策定から実際の治療・リハビリテーション・ケア・在宅支援に至るまで、非常によい循環が生まれるとともに、スタッフのモチベーションアップにもつながっているそうです。



教育委員会の皆さん(写真提供: 袖ヶ浦さつき台病院)

教育委員会

専門職連携教育で水平型チーム医療を強化

教育委員会は、社会医療法人さつき会の関連施設で構成され、今年発足したばかりの新しい取り組みです。看護部長の竹内さんは「これまでの管理職研修を通して、各職種間の“対話と提言”が課題であることが浮き彫りになりました。そこで、委員会では各職種が互いの力を出し合い、支え合うための社会人基礎力やマネジメント教育を目的にしています」と語ります。

教育委員会委員長の玄永春奈さんは、「多職種連携が始まって以来、連携教育の大切さを実感しています。まずは“理想の職員像”の共有から始めます」と意気込みを語ってくれました。

栄養サポートチーム

栄養学をすべてのケアの土台に

栄養サポートチームは、管理栄養士を中心に各科の医師、看護師、理学療法士、薬剤師らが参加し、低栄養の患者さんの治療・ケアを行っています。

チームの調整役である看護師の藤田さやかさんは、「水分、食事、運動、便。この4つがうまく回らないとQOLが低下し、せっかくの治療も水の泡になってしまう。それだけに、NSTはすべてのケアの土台なんです」と語ります。とくに、高齢者では低栄養になりやすいことから、スタッフに対する認知症の方への食事介助指導や、ご家族に対する在宅療養における栄養指導など、超高齢社会を見すえ、さまざまな側面からサポートしています。



栄養サポートチームの皆さん



チーム回診の様子

キッズBLSチーム

救命のバトンを次世代へ

キッズBLS（一次救命処置）チームは、毎年市内の小学校に出向き、6年生を対象に心肺蘇生、AEDの使い方などを教えています。メンバーは看護師をはじめ、リハビリテーションスタッフ、ライフメイト、事務スタッフなどの多職種で、BLSプロバイダーの資格を取得しています。看護師の内藤夕美子さんは、「子どもたちが学んだことを友人や家族と語り、また私たちが職種を問わずBLSに取り組むことで社会的関心が高まり、地域の自助力が向上することを願っています」と笑顔で語ってくれました。



キッズBLSチームの皆さん



子どもたちからは「命の大切さがわかった」と好評です（写真提供：袖ヶ浦さつき台病院）

地域医療連携室



地域医療連携室の皆さん

モットーは“聞く・つなぐ・動かす”

地域医療連携室は、病院内外の情報を統括する役割を担っています。主な業務は、退院移行支援、地域の相談窓口、診療録管理などで、さらなる多職種連携の強化に向けて、情報のネットワーク化と活用を目指しています。メンバーには部長の小川久子さんを筆頭に、退院調整看護師、病棟クラーク、医療福祉相談員など多職種が在籍しています。「情報を介して、人と人をつなぐ役割を担っていきます」（医療情報部課長・小泉彩枝さん）。



（写真提供：袖ヶ浦さつき台病院）

社会医療法人社団さつき会 袖ヶ浦さつき台病院

〒299-0246
千葉県袖ヶ浦市長浦駅前5-21 TEL：0438-62-1113(代)

病院理念

1. 愛情と感謝の念をもって医療・保健・福祉サービスを提供し、地域に貢献する。
2. 職員は相互に理解と思いやりをもって、専門職としての成長を図り、より質の高い人生を目指す。
3. 社会的自立のもと、人材の育成に努め、時代の変化に対応し、開かれた組織として発展を期す。

看護部理念

さつき会の理念の実現を目指し、明るく、前向きに、主体的に生命の質を高めるケアを提供する。

開設年月日

昭和58(1983)年2月8日

職員数

691人(常勤511人、非常勤180人)※内医師数(常勤25人、非常勤59人)看護師数(常勤195人、非常勤50人)

病床数

409床

病床利用率

95.5%

平均在院日数

18日

1日平均外来患者数

334.2人

1日平均入院患者数

347.5人

看護配置

一般病棟入院基本科7対1、精神科救急入院科10対1、回復期リハビリ病棟入院科I

看護職員平均年齢

40.2歳